

der Wissenschaften XXVII は即ちそれである。氏の説によると Radloff 氏の圖の中に出て居る第三十二圖と第三十三圖に見えて居る文字は明らかに Sogd の言葉即ちイラン語の系統を引ける言葉で書いてあるといふのである。既に Radloff 氏はそのクダツクビリクなる書の翻譯に於て此碑文の數行を書き寫してトルコ語として之を讀むで居る (Das Kudatku Bilik, Teil I, S. LXXXV und Faksimile) 勿論圖について見ればわかる如く此等の文字は頗ぶる磨滅して判然しがたい處があるので氏は幾分之れを補筆して書き寫して居るのであるが、この補筆なることに就ては餘程慎重の考を要することは勿論である。既に氏は根本に於て之をトルコ語と見て居るのであるから、不明の字畫を補ふにつけても何とかしてトルコ語中に存する文字にしたいと考へるのはまた止むを得ぬ次第と云はなければならぬ。然るに Miller 氏は此補筆によれる書寫を不完全とし、出來得る限り原字畫に近いものに復せしめて研究した結果、終に文字はもとより回鶻字であるがその言語は Sogd 語であると斷言するに至つたのである。しかし Sogd 語なるものが既によくは解らない死語であるからして氏の解釋し得たのはたゞその一部分にすぎない、今一々碑文に見えて居る文字と兩氏の補筆によれる書寫とを茲に示してどちらが正しいかの判断を讀者に乞ふことの出來ないのは甚だ遺憾であるけれども、自分は少くとも Miller 氏が解釋を施して居る文字について之をトルコ語で説かうとするのは誤りに相違ないと承認するのである。たゞし Sogd 語なるものを知らないからトルコ語でないといふことに於てのみ氏の説に賛するので其他に於ては一切是非を稱ふる限りでない、しかし氏が之を Sogd 語と見て解釋した結果は碑の一方なる漢字の文句もよく一致するのであるからして思ふに誤はないであらう、今たゞ二三の例を擧げて見るならば Radloff 氏はその考古圖の第三十二の(1)の二行目を前に記した